



特715
6301



返進ス可シ若シ本人疾病又ハ逃亡又ハ其他ノ原因ニヨリ其住所ニ在ラサル片ハ其事由ヲ申報書ニ詳記シ其地ノ區長又ハ戸長連名捺印ス可シ

第五十九條 勾留状ハ呼出状又ハ勾引状ニヨリ本人一應ノ訊問ヲ経タル後其事情ニヨリ之ヲ出ス可シ

第六十條 勾留状ハ司法警察官其面前ニ於テ本人ニ讀聞カセ使吏ヲシテ本人ト共ニ獄吏ニ送付セシメ獄吏之ヲ受テ簿冊ニ登記シ勾留状ノ裏面ニ申報書ヲ記シ直ニ之ヲ返進ス可シ

第六十一條 現行犯及ヒ事機緊急ナル罪犯ニ於

97
07

91

106

昭和十八年十二月十四日
鷗田乙丑
贈

ラハ持ニ令状アルトヲ必要トセス

第十章 假宥

第六十二條 罪犯假宥ヲ得ル者ハ直ニ其住所ニ還ルトヲ得ヘシ

第六十三條 假宥ハ輕罪ニ止ル但ニ事犯ノ情狀ニヨリ重罪ト雖モ假宥スルトヲ得ヘシ

第六十四條 先ニ重罪ヲ犯シ若クハ懲役又ハ禁錮一年以上ノ罪ヲ犯シ既ニ断決ヲ經タル者ハ假宥ス可キノ限ニ在ラス

第六十五條 被告人ハ最初ノ糾問ヨリ五日ノ後何時ニテモ假宥ヲ乞フトヲ得ヘシ

第六十六條 檢事ヨリ糾問ヲ求メタル以上ハ糾問判事ニ假宥ヲ乞ヒ裁判ヲ求メタル以上ハ其裁判所ニ假宥ヲ乞フ可シ

第六十七條 判事又ハ糾問判事ハ假宥ヲ行フニツキ必ス檢事ノ意見ヲ求ム可シ

第六十八條 假宥ヲ乞フ者ハ其親戚隣佑ヨリ一人又ハ二人以上ノ保證ヲ要スヘシ其保證人タル者ハ左ノ兩件ニツキ證書ヲ納ム可シ

- 一 被告人ヲシテ何時ニテモ呼出ニ應セシム可キ事
- 二 左ノ費用ヲ擔當ス可キ事

被告人逃亡シタル者ハ探偵捕縛ノ費用

要償ノ訴アル者ハ民事ノ費用

罰金ノ刑ヲ受ケタルハ其金圓
保證人ハ當該官ノ意見ニ依リ改選セシムル
ヲ得ヘシ

第六十九條 被告人既ニ假宥ヲ得ルト雖モ時宜
ニヨリ更ニ令状ヲ出スヲ得ヘシ

第十一章 糺問濟

第七十條 糺問判事糺問ニテ被告人無罪ニ歸
シ又ハ有罪ノ證據ナキハ檢事ノ意見ヲ求
メ而後之ヲ放免ス可シ

第七十一條 糺問判事ハ被告人重罪又ハ輕罪又
ハ違警罪アリト為スハ即チ証憑文書ヲ具
ヘテ檢事ニ還付ス可シ

133
130
129
135

第七十二條 輕重ノ罪犯ハ檢事ヨリ直ニ判事ニ
付シテ裁判ヲ求メ違警ノ罪犯ハ檢事ヨリ區
裁判所ニ移ス可シ

第七十三條 檢事ハ糺問判事ノ糺問ニ於テ不服
ナルハ再ヒ他ノ糺問判事ノ糺問ヲ求メ或
ハ直ニ判事ニ付シテ裁判ヲ求ムルヲ得ヘ
シ

第二篇 裁判諸則

第一章 區裁判所權限

第七十四條 區裁判所ニ於テハ罰金一圓五十錢以下拘留十日以下ニ処ス可キ違警罪ヲ裁判ス可キ

違警罪ヨリ生スル要償ノ訴ハ其金額十圓以下ハ區裁判所ニ於テ之ヲ裁判シ十圓以上ハ府縣裁判所ニ移ス可キ

第七十五條 區裁判所ニ於テハ違警判事一人判事ノ事務ヲ行ヒ警部若クハ區長一人檢事ノ事務ヲ行ヒ別ニ書記一人ヲ撰フ可キ

第七十六條 違警判事派出ナキノ裁判所ニ於

大審院

テハ警部若クハ區長判事ノ事務ヲ行ヒ他ノ
警部若クハ區長檢事ノ事務ヲ行フ可シ
違警判事疾病事故アルモ亦此條ニ准ス可
シ

第七十七條 區裁判所ノ裁判ハ別ニ下調ヲ用
ルヲナカル可シ

第七十八條 區裁判所ニ於テ事犯輕重罪タル
トヲ覺發シタルモ其裁判ヲ停止シ直ニ府
縣裁判所ノ檢事ニ交付ス可シ

第二章 府縣裁判所權限

第七十九條 府縣裁判所ハ重罪及ヒ輕罪又ハ
違警罪ノ控訴ヲ裁判ス可シ但シ死罪ハ上等

裁判所ノ再審ヲ受ケ而後刑名宣告ヲ為ス可
シ

第八十條 府縣裁判所ノ裁判ニ於テ輕罪ハ裁
判官一人以上重罪ハ裁判官三人以上廷ニ列
ス可シ

第八十一條 府縣裁判所ニ於テ審問ノ後事犯
違警罪ニ止ルモ直ニ終審ノ裁判ヲ為ス
ヲ得ヘシ

第八十二條 府縣裁判所ノ支廳ハ本廳ト同一
ノ權アリトス但シ重罪ハ本廳ノ批可ヲ受ケ
而後裁判宣告ヲ為ス可シ

第三章 上等裁判所權限

第八十三條 上等裁判所ハ輕重罪ノ控訴ヲ裁判シ及ヒ死罪ヲ再審ス可シ

第八十四條 上等裁判所ハ總テ文書ニ依リ死罪ノ再審及ヒ輕重罪ノ控訴ヲ判決スト雖モ若シ難獄疑獄ニ涉リ往復文書ヲ以テ事實ヲ詳ニシ難キハ被告人又ハ時宜ニヨリ証人被害人ヲモ引致シテ審判スルコトヲ得但シ罪犯又ハ罪犯ニ關係ノ者衆多ナル時又ハ其他ノ事故アリテ引致シ難キ時ニ於テハ上等裁判所ヨリ判事檢事ヲ派遣シテ審判セシムルコトヲ得ヘシ

第八十五條 上等裁判所ノ裁判ハ裁判官三人以上廷ニ列ス可シ

第八十六條 上等裁判所ハ管下府縣裁判所ノ權限相觸ルモノ有ルハ便宜ニヨリ一方ノ裁判所又ハ他ノ裁判所ニ付シテ裁判セシムルコトヲ得ヘシ

第四章 大審院權限

第八十七條 大審院ハ各裁判所不當ノ裁判ヲ破毀シ全國一定ノ法律ヲ維持ス

第八十八條 大審院ハ一切ノ上告ヲ受ケ控訴ヲ受ケス

第八十九條 大審院ハ通常各裁判所及ヒ海陸軍裁判所ノ裁判權限ヲ誤ルモノ有ルハ相當ノ裁判所ニ付シテ裁判セシム可シ

其各裁判所ノ権限相觸ルモノ有ルハ便宜ニヨリ一方ノ裁判所又ハ他ノ裁判所ニ付テテ裁判セシム可シ

第九十條 大審院ハ國事犯及ヒ内外交渉事犯ノ重大ナル者并ニ違警犯ヲ除クノ外各判事ノ犯罪ヲ裁判ス可シ

第九十一條 大審院ノ裁判ハ裁判官五人以上延ニ列ス可シ

第九十二條 大審院ハ法律改正制定ノ意見ヲ具ヘ司法卿ヲ經由シテ上奏スルヲ得ヘシ

第五章 裁判法通則

第九十三條 裁判ヲニ法ニ定メ一ヲ通常裁判

ヲ答ヘシメ又ハ時宜ニヨリ之ヲ証人ニモ示ス可シ

第百六條 裁判長ハ証人ノ供述全ク詐偽ト思察ス可キハ檢事又ハ被告人ノ請求ニヨリ又ハ自己ノ職權ヲ以テ直ニ取押ヘ相當ノ処分ヲ為ス可シ

第百七條 前條ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ其裁判延期ヲ求メ又ハ裁判所ノ特權ヲ以テ之ヲ命スルヲ得ヘシ

第百八條 審問中言語相通セサル者アルハ裁判長其職權ヲ以テ通辨人ヲ撰ヒ正實ニ双方ノ言語ヲ譯解ス可キ誓書ヲ呈セシメ而後通辨ヲ命ス可シ

第百九條 審問中其裁判所内ニ於テ罪ヲ犯ス者アルキハ裁判長直ニ犯人ヲ糾問シ証人ノ供述ヲ聽キ犯罪明細書ヲ作り檢事ノ意見ヲ求メ相當ノ處分ヲ為ス可シ

第六章 通常裁判法

第百十條 班列既ニ定テ裁判長ヨリ被告人ノ住所族籍姓名年齢職業ヲ審問ス可シ

第百十一條 裁判長ハ被告人ノ審問中各人ノ言語ニ注意ス可キヲ命シ而後書記ヲシテ公訴狀其他必要ノ文書ヲ朗讀セシム可シ

第百十二條 裁判長ハ前條ニ於テ朗讀セシメタル事件ニツキ更ニ注意ス可キヲ被告人

掲載ニタル罪ヲ犯サハルヲ又ハ平常ノ品行及ヒ廉潔ノ性質名譽ヲ完フスルノ人タルヲ辨解スル為メ其証ヲ述フ可シ

第百十九條 被告証人ノ供述及ヒ其供述ニツキ辨論既ニ終テ檢事罪狀ヲ撮約シ罪証ヲ辨明シテ刑ヲ求ム次ニ被告人自己ノ意見ヲ述フ檢事ハ更ニ答辨スルヲ得然モ辨論ノ結末ニ於テハ被告人必ス答詞ヲ發スヘシ

第百二十條 裁判長ハ原告被告ノ辨論既ニ終リタルヲ告テ退テ刑名ヲ議ス但シ無罪ニ決スルキハ直ニ放免ス可シ

第七章 臨時裁判法

第百二十一條 第百十條ノ処分既ニ終テ裁判長ハ書記ヲシテ代官人ニ向ヒ左ノ文案ヲ朗讀セシム此時代官人起立ス

代官ニ告示ス代官ハ被告人ヲ辯護スルノ職タルヲ忘ル可カラス其本心ニ反異ニタル辯論ヲ為ス可カラス法權ヲ侵シ法廷ヲ侮ル可カラス言語ヲ慎ミ礼節ヲ守ルヘシ

何裁判所

年号月日

裁判長姓名花押

右裏面答案

表書ノ旨趣謹テ領承ス

代官人 姓名

書記讀終テ代官人ニ付ニ捺印セシム

第百二十二條 裁判長ハ書記ヲシテ陪審ニ向

ヒ左ノ文案ヲ朗讀セシム此時陪審起立ス陪審ニ告示ス陪審ハ原告被告ノ辯論ニ於テ愛憎畏懼ノ心ヲ生スルヲナク静思沈按双方ノ權利ヲ害セス他ノ意見ヲ借ラス自主ノ權利ヲ主持シ公明誠直ノ人タル哀情ヲ尽シ其本心ト名譽トニ背カスシテ決答ス可キヲ誓約ス可シ

何裁判所

裁判長姓名花押

大審院

右裏面答案

表書ノ旨趣謹テ領承ス即チ自己ノ本心ト
名譽トニ背カス決答ス可キトヲ誓約ス

陪審

姓名

書記讀終テ陪審ニ付シ各自捺印セシム

第百二十三條 第百十一條ヨリ第百十六條マ

テノ処分既ニ終テ裁判長ハ証人ニ其供述セ

シ條件ノ管係ハ被告人何某ニ相違ナキヤラ

審問ニ而後被告人又ハ代言人ヨリ証人ノ供

述ニツキ答辯スルヲ得ヘシ

第百二十四條 第百十八條被告証人ノ供述及

ヒ其供述ニツキ辨論既ニ終テ檢事罪状ヲ撮

約シ罪証ヲ辨明ス次ニ被告人又ハ代言人ヨ
リ其意見ヲ述フ檢事ハ更ニ答辯スルヲ得
然レ辨論ノ結末ニ於テハ被告人又ハ代言人
ヨリ必ス答詞ヲ發ス可シ

第百二十五條 裁判長ハ原告被告ノ辨論既ニ

終リタルトテ告ケ且ツ其重要ナル諸件ヲ撮

約シテ陪審ニ告ケ而後陪審ヲシテ其職務ニ

注意セシム可シ

第百二十六條 裁判長ハ左ノ文例ニ依リ裁判

問題書ヲ作ル可シ

如何ナル罪犯ニテモ左ノ問題ヲ掲載ス可

シ

被告人ハ公訴状ニ記シタル情状ニヨリ

337
338
339
340
341

審
完

云々ノ罪ヲ犯シタルヤ

被告人罪ヲ軽クス可キ情状アラハ其旨
ヲ決答ス可シ

審問ノ後意外ニ罪ヲ重クス可キ情状アル
片ハ

被告人ハ云々ノ情状ニヨリ罪ヲ犯シタ
ルヤ

被告人ノ所為法律上ニテ赦宥ヲ得ヘキ罪
犯タルヲ被告人又ハ代言人ヨリ述タル

片ハ

被告人ノ犯罪法律上ニテ赦宥ヲ得ヘキ
情状アリヤ

被告人年齢十六歳以下ナル片ハ

